

樋口一葉「わかれ道」論

——共生の夢と心の炎——

塚 本 章 子

はじめに

「わかれ道」は、主人公がお京か吉三かをめぐる論議がなされてきた。主にお京に注目してきた論の中で、吉三を主人公として強く打ち出そうとしたのは、榊原美文氏⁽¹⁾や藤井淑禎氏⁽²⁾であった。その一方で、最終的にはやはりお京に重心を置く⁽³⁾とする論は根強い。松坂俊夫氏⁽³⁾、河村清一郎氏⁽⁴⁾、滝藤満義氏⁽⁵⁾、高田知波氏⁽⁶⁾らの論をあげることができるだろう。しかし、「作家一葉の内面の両極がこういう形で出てきているんだと思うし、それは激しく統一を求めて」という山田有策氏の発言や、「どうやら問題は物語に単一・絶対的な『主人公』という中心」を設定せずにはいられないわれわれの読み

そのものにあるのではないだろうか。吉三を造形したのも一葉であれば、お京を設定したのも一葉である。」という関礼子氏⁽⁸⁾の指摘は重要である。問題は、どちらの人物に比重が置かれていくかということにあるのではなく、一つの作品の中で二人の登場人物を拮抗させながら、何が描かれているのかということであろう。山田有策氏は「孤絶そのものが非常につきりと前面に出てきたのが、この『わかれ道』という作品」であると指摘する。また、関礼子氏は「一葉のほんとうの狙いは、題名から察せられるように、見せかけのコミュニケーションに潜む真の対立を描くことにある。」と述べている。このように、「わかれ道」は、お京と吉三の齟齬や別れに焦点を当てて論じられることが多い。だが、二人の齟齬や別離に注目するだけでは不十分ではないだろうか。戸松泉氏⁽¹⁾

は、「二人が（わかれ）ていく理由を探ることや、（わかれ）に至るプロセスを一義的に解釈することが唯一の読みの方向性なのではなく、むしろこの一年にも満たない交差した（時間）が、それぞれの中でどのような意味を持ったのか、或いは持たなかったのか、そこそを問うことを促されるのではないか。」と指摘している。

二人の主要人物が、一つの作品に押し込められ拮抗している以上、彼らを統合する接点と、その差異によって見えてくるものもまた、問われねばなるまい。小稿では、いかに生きればこの世の生き難さを越えていけるのかという問いへの模索が、目の前の現実の中で他者との共生を求めようとする吉三と、あるべき現実とあくなき自己の生の充足を求めようとするお京の姿を借りて、人と人との関係の中で描かれようとしていたことを明らかにしたい。

—

吉三は、お京に比べると、自信を持って積極的に生きるこゝとができない弱々しい人間に見える。だが、彼は厳しい現実の中で、彼なりの主体性を持って生きていたのである。吉三

の「出世」に対する態度を手掛かりにして、彼の生き方を探っていこう。

吉三は、お京との会話の中で「己れなんぞ御出世は願はない」、「己れは何うしても出世なんぞは為ない」と言い、出世について、消極的というよりも、むしろ拒絶する態度を見せる。それは、次の言葉からうかがえるように、吉三が今おかれている状態に満足していたからではない。

何だ傘屋の油ひきになんぞ、百人前の仕事をしたからとつて褒美の一つも出やうでは無し朝から晩まで一寸法師の言れつゞけで、夫れだからと言つて一生立つても此背が延びやうかい、

それにもかかわらず、吉三は今の状態から抜け出したいという願望を抱いていない。

吉三は、当時「三大貧窟」の一つであった「新網」から、傘屋の先代のお松に拾われてきた。お松は、吉三を可愛がった。だが、その二年後にお松は死んでしまう。「今の主も内儀様も息子の半次も氣に喰はぬ者のみ」であつても、吉三はこの傘屋にとどまり続ける。「此処を死場と定めたるなれば厭

やとて更に何方に行くべき」という一文は、その理由を二つ示している。一つは、吉三は、「お前新網へ帰るが嫌やなら此家を死場と極めて勉強をしなけりやあ成らないよ」と言ったお松に、忠実であろうとしていたのである。そしてもう一つは、「厭やとて更に何方に行くべき」ともあるように、行くところがないというのも事実だったのである。管聡子氏も指摘するように、吉三は出世から閉ざされた存在である。「新網」に育ち、自分を支えてくれる人もなく、「筋骨つまつてか人よりは一寸法師一寸法師と誹らるゝ」という身体を抱えた吉三に、この時代に、夢物語ではないどんな出世が想定できただろう。

親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう、何故其様な意気地なしをお言ひだと励ませば、己れは何うしても駄目だよ、何にも為やうとも思はない、と下を向いて顔をば見せざりき。

そこには、吉三の根深いコンプレックスと絶望とが透けて見える。しかし吉三は、「己れなんぞ御出世は願はない」、「己れは何うしても出世なんぞは為ない」、「誰れが来て無理やり

に手を取つて引上げて己れは此処に斯うして居るのが好いのだ、傘屋の油引きが一番好いのだ」と言いながら、自分の弱さを包み隠していこうとする。こういった言葉は、今より落ちぶれこそすれ、出世することなど完全に閉ざされていることを知っている吉三が、お松の恩に答えながら、精一杯に、今ここで主体的に生きようとするための意識の転換であっただろう。吉三は、意識的に、今ここにとどまり続ける者である。

出世を云々言い、遠い将来を夢見ることよりも、吉三には自分という存在自体がすでに謎であり、今日明日という日を生きるこの意味を問いつけねばならないのである。今までに、ただの一人も自分と血のつながった人間に合ったこともなく、「本当に己れは木の股からでも出て来たのか」と、自分という存在について、「幾度も幾度も考へては」、「今のうち死んで仕舞う方が気楽だと考へ」、「もう少し生て居やうかしら、もう一年も生て居たら誰れか本当の事を話して呉れるかと楽しんでね、面白くも無い油引きをやつて居る」という吉三は、常に生と死を身近に感じながら生きねばならない。吉三は、「仮にも優しい言ふて呉れる人のあれば、しがみ附いて取つて離れがたなき思ひなり」という程に、どうにも埋め

ることのできぬ寂しさを抱えながら、それ故にこそ、目の前の現実の中で、懸命に幸福を探し続けるのである。吉三の求めるのは、何の不安もない、暖かい愛情にすっぽりと包み込まれる、人との共生であった。

妾になっていくお京を、吉三はどうしても許そうとしな
い。「明日の晩は最うお前の声も聞かれない、世の中つて厭や
な物だねと嘆息する」お京に、「夫れはお前の心がらだ」と、
吉三は「不満」らしく言う。「お前の心がら」という言葉は、
重要である。吉三とて、決して生きやすい世を生きているの
ではないことは、先に述べた通りである。お松への恩を忘れ
ず、生と死の狭間で寂しさを抱えながら、しかし目の前の現
実を見つめて、人との愛情のある共生、幸福な生を求めて一
生懸命に生きる吉三は、確かにその「心がら」一つで、「世の
中つて厭やな物だねと嘆息する」ことを、回避しえていたの
かもしれない。

ましてや夜中でも傘屋の吉が来たときへ言へば
寝着のまゝで格子戸を明けて、今日は一日遊びに来な
かつたね、何うかお為か案じて居たにと手を取つて引入
れられる者が他に有らうか、お気の毒様なこつたが独活

の太木は役にた、ない、山椒は小粒で珍重されると高い
事をいふに、此野郎めと背を酷く打たれて、有がたう御
座いますと済まして行く顔つき背さへあれば人串談とて
免すまじけれど、一寸法師の生意氣と爪はちきして好い
鬻りものに烟草休みの話しの種成き。

お京が、それほど丁重に吉三を招き入れたことがあつたか
どうかは、分らない。(上)では、夜遅く訪ねた吉三に、お
京は「最う寝て仕舞つたから明日来てお呉れと嘘を」言つた
り、「又御餅のおねだりか」と、からかい気味に接している。
吉三の言葉には、少々虚構が混ざっているようなのだが、そ
こには、自分がお京に最も親しくされているという吉三の誇
らしさがにじみ出ており、お京が引越してきてからの吉三
の生活が、張り合いや喜びのあるものとなっていることが伺
える。そしてまた、「好い鬻りものに烟草休みの話しの種成
き」という表現からは、吉三が周囲から馬鹿にされ持て余さ
れながらも、人々の心の中にそれなりの居場所を確保するよ
うになつていたことが感じられるのである。

また、次の箇所にも注目したい。

十二月三十日の夜、吉は坂上の得意場へ詠への日限の後れしを詫びに行きて、帰りは懐手の急ぎ足、草履下駄の先にかゝる物は面白づくに蹴かへして、ころ／＼と転げ

ると右に左に追ひかけては大溝の中へ蹴落として一人から／＼の高笑ひ、聞く者なくて天上のお月さまも皓々と照し給ふを寒いと言ふ事知らぬ身なれば只こ、ちよく爽にて、帰りは例の窓を敲いてと目算ながら横町を曲れば、

ここには、吉三の生き生きとした躍動的で楽しげな姿が描かれている。確かにこの世は、吉三にとって生き難いものに違ひなかつた。それでも吉三の「心がら」は、一日一日の生活の中に、苦しさだけではなく、喜びや小さな幸福感をも感じていく明るさやたくましさや彼にもたらしっていたといつてよい。

語り手は、このような吉三を「潔白」と表現する。また、右にあげた「聞く者なくて天上のお月さまも皓々と照し給ふ」という表現や、「心細き事を思ふては干場の傘のかげに隠れて大地を枕に仰向き臥してはこぼるゝ涙を呑込みぬる悲しさ」という表現からもうかがえるように、天と地の間で、

悲しみも、嬉しさも、全て体いっぱい引き受けて躍動する吉三の生命を、天上の「お月さま」も「大地」も、かばうように、そして慈しむように見守っているのである。

だが吉三の望みは、何時までたつてもかなえられないものであつた。

あ、詰らない面白くない、己れは本当に何と言ふのだらう、いろ／＼の人が鳥渡好い顔を見せて直様つまらない事に成つて仕舞ふのだ、傘屋の先のお老婆さんも能い人で有つたし、紺屋のお絹さんといふ縮れつ毛の人も可愛がつて呉れたのだけれど、お老婆さんは中風で死ぬし、お絹さんはお嫁に行くを嫌やがつて裏の井戸へ飛込んで仕舞つた、お前は不人情で己れを捨て、行し、最う何も彼もつまらない、

ここにあるのは、人間同士が睦まじく暮らしていくことを、次々に阻んでしまう世のむごさである。「女相撲のやう」にたくましかつたお松も、あつけなく死ぬ。人である限り、絶対死に死というものから逃れることは出来ない。紺屋のお絹は、意に沿わぬ結婚に追い詰められ、自ら死を選んだ。そし

て、これから述べていくように、お京も、貧の厳しさの前で、もはや吉三の救いにはなれない。結局、誰も吉三の望みに答えることはできない。人と人との幸福に生きていくこと、ただそれだけのことが、この世ではたやすくはかなわぬことであつた。

二

お京に関する情報は、非常に少ない。しかし、その少ない情報から受ける印象は、むしろ鮮やかであり、たくましい個性的な姿を読み取ることが可能である。ここでもやはり、「出世」に対する態度から、お京の生き方を探っていく。

お京は「出世」を夢見て、吉三にいつか「運が向く時」、「糸織の着物をこしらへて」あげると語っていた。だが、それがどういう時なのか、具体的には描かれていない。事情は書かれていないが、「二十余り」という当時においては婚期を過ぎた女性、そして、「以前が立派な人」らしいと書かれるように、没落というベクトルを歩むお京に、具体的なビジョンなど何もありはしなかつただろう。にもかかわらず、お京は、何時か豊かで幸せな日が訪れることを、漠然と待ち望んでい

た。お京が見つめていたのは、現在ではなく、あるかないか分かりさえもしない、望ましい未来であつた。そして、そういうお京だったからこそ、自分が「乞食の子」ではないかとおびえ、もしそうなら今までのように可愛がつてはくれまいと言う吉三を励まし、何のさげすみもなく受け入れてやることができもしたのである。お京は吉三に、「親が無からうが兄弟が何うだらうが身一つ出世をしたらば宜からう」と言う。だが、この、「身一つ出世をしたらば宜からう」という言葉が含み持っている、自分という個に対する完全な肯定は、お京がここで「出世」と言つてみせたような世俗的な倫理の範疇から踏み出してしまふ可能性をも含んでいた。

お前さんなどは以前が立派な人だと言ふから今に上等の運が馬車に乗つて迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾に成ると言ふ謎では無いぜ、悪く取つて怒つてお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を歎くに、左様さ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顔を守りぬ。

「馬車の代りに火の車」という言葉を、軽く読み過ごすことは出来ない。定稿では捨てられるが、「にぎりえ」の未定稿Cには、次のような記述がある。

菊の井のお力といへば姿形の美しくしきに似ず、心にふくの毒を持つか甘い事をば言はれるほどの者身の内の血を頭にあつめて足はよろ／＼と寝てもころげても食のつくほどは通ひつめ、世には捨られ人に見限られておほりの松に首をつりし者もあり、(略)お前の背には幽霊がたんとつきそふて居るからやみの夜にお寺のはか場があるいたとて怕い事はあるまい、心丈夫にどんな処へにも行かれるであろうと朋輩の憎くまれ口、はあ極楽か地獄か其ほどは知らないが行くとなつたら定めて迎ひは沢山来るであろう、此世で馬車にのれなかつたら火の車の事と極めて置いた、私しやあどつちでも御遠慮は申さないよと平気な顔つき、お前ほどの不人情を見た事がないといへばふゝんと笑つてお互様とけなして居る、心は悪魔か鬼かとおもへど夜半の寝ざめの枕をとへかし、涙瀧の如くにながれて身もうく斗の嘆きあり。(傍線塚本)

定稿では、お力のこういつた毒々しい姿は薄められ、苦悩の姿が強調されていくのであるが、この未定稿でのお力は、地獄で燃えている火の車に乗ると平然と言つてのける。悪なら悪でもかまうものかという、不敵な開き直りをみせているのである。その同じ言葉をお京も口にする。「随分胸の燃える事が有るからね」と言う以上は語らぬまま、吉三の顔をじつと見つめるお京の意味ありげな姿には、未定稿のお力の不敵な姿が一瞬重なつて見える。お京もまた、この世の善悪の規範など踏み越えてしまうような激しい衝動を持っていたのである。

お京のおかれている現状は、相当に厳しいものであった。お京の仕事屋としての労働が、かなり重いものだったことは、すでに関札子氏も指摘している。

お京はといえば、吉三が訪れても一向に縫物の手を休めようとはしない。物語の冒頭、吉三の訪れを受けてお京は「仕立かけの縫物に針どめして立つ」。吉三が餅を食べなどしてすっかり寛いでいるのに、お京は「今夜中に此れ一枚を上げねば成らぬ(上)」という状態だ。余暇時間の吉三とは対照的にお京は仕事なのだ。(略)松原岩五

郎によれば「東京女の内職として七錢五厘とは結構なもの」(「資本制と手工業」、「国民新聞」明26・11・19)であり、「仕入屋仕事」の請負に至っては「単物一枚の縫賃二錢五厘」(「工銀の比例」、同明26・12・9)という廉価であったという。お京の仕事が独立自営か請負かは明らかにはされていないが、長時間労働の割には実入りの少ない仕事であったことはたしかだ。

少し付け加えておけば、「多い髪の毛を忙がしい折からとて結び髪にして」いるのは、お京がいかに時間に追われているかを表している。また、「御餅を焼くには火が足りないよ、台処の火消壺から消し炭を持つて来てお前が勝手に焼とお喰べ」とあるように、お京には、ほんの少し手を休めて吉三に餅を焼いてやる暇もない。そして、こういった状態が珍しいものではなかったことは、「例の如く台処から炭を持出して」という表現に暗示されている。お京は、すでに半年以上、このような苛酷な生活を続けていた。時間に追いつて立てられる緊張感をともなう不規則な生活が、そんなに長く続けられるものではない。ましてや年末ともなれば、「忙がしくしてお飯を喰べる間も」ないという。そして、お京が妾になることを決め

た晩の、吉三に「いきなり後より追ひすが」り、「両手に目を隠くして忍び笑ひをする」という奇妙な羽目を外した態度は、ぎりぎりにまで追い詰められた緊張から、一気に解放された状態を感じさせる。それは、これまでどんなにお京が追い詰められていたかを物語っている。女一人口とはいっても、お京の生活が、ひどく困難なものだったことが感じ取れるのである。

また未定稿では、お京の口から経済的状況の苦しさが語られており、定稿よりも明確に書きこまれようとしていた。

未定稿B IV 1

私が手仕事の縫はりも三十円ある日に三十五枚こしらへあげても知れた物、其日の事を其日に送つて、

未定稿B IV 4

手内職に寝る目を寝ないで三十円ある日に三十五枚の仕事をしようともよいと思ひ立つたのだから

「三十円ある日に」というのは、その仕事が請負仕事であることを示している。お京を語るとき、彼女の背景に貧の厳し

さ、労働の極限状況がある事を無視してはならない。

そうであれば、「何もお前女口一つ針仕事で通せない事もなからう」という吉三の言葉は、無理解な言葉以外のなにものでもなかったはずである。果たしてお京は、自分で妾になることを選んだと言えるのだろうか。管聡子¹⁵氏が指摘するように、「彼女が自らの幻想を放棄する道を選んだ」とか、また橋本威氏¹⁶もいうように、「お京にとつての、人生の〈岐路〉」でもあったと、言いうるのだろうか。毎日毎日、貧しさに追われるように縫い続けても、ほんの少し息をつく余裕もない。何の喜びも、見通しもない労働に、お京はもう耐えられなかった。「行きたい事は無いけれど」、機械ではなく、喜怒哀楽の感情を持つ人間であればこそ、行かざるを得ない。それは、選択と呼べるほどに積極的なものではない。いくら清廉潔白に生きたいと願っても、貧しさがそれを許さない。

しかし一葉は、未定稿のこの箇所を定稿で消してしまふ。

そのことから考えても、お京が、ただ嘆くのではなく、いかにしてこの世の生き難さを越えていこうとするか、そこにこそ、この作品の一つの眼目があったと思われる。

吉三の前で、「上等の運が馬車に乗つて迎ひに来たといふ騒ぎだから彼処の裏には居られない、吉ちゃん其うちに糸織

ぞろひを調べて上るよ」と、喜んだ顔をして見せながら、本当にやってきたのは「馬車」などでないことは、お京も承知していた。「何も私だとして行きたい事は無いけれど行かなければ成らないのさ、吉ちゃんお前にも最う逢はれなくなるねえ、とて唯いう言ながら萎れて聞ゆれば」、あるいは「明日の晩は最うお前の声も聞かれない、世の中つて厭やな物だねと嘆息するに」といった言葉から伺えるように、お京の心の奥底には、やるせない悲しさがあつたはずである。だがお京は、その悲しさを打ち消そうとしていた。

夫れでも吉ちゃん私は洗ひ張に倦きが来て、最うお妾でも何でも宜い、何うで此様な詰らないづくめだから、寧ろその腐れ縮緬着物で世を過ぐさうと思ふのさ。

思ひ切つた事を我れ知らず言つては、と笑ひしが、

お京は、強気に振る舞つて見せる。そして、「そんならお妾に行くを廢めにしなさるか」という吉三の必死の引き止めを、お京は、「誰も願ふて行く処では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから夫れは折角だけれど聞かないよ」と、きっぱり断るのである。

お京は、金銭の強大な力について抗いきれなくなつたとき、「最う」、「何でも宜い」と、開き直つたのである。先に述べたように、お京の中には、激しく沸き上がる感情、「馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有る」という、世の倫理を超越しかねぬ危うい衝動があつた。それが、ここでふと頭をもたげたのである。他の者なら泣くところを、お京はあえて笑つて見せた。巨大な世の中で、生き難さに耐え切れず、ついに押し流されてしまわざるを得ない自分を、世間の人々が悪だというのなら悪でもいい、それは先に述べたようなお京の「身一つ」への信頼とどこかで底通している。お京は、この世の生き難さを、世俗的な倫理観を振り捨て、全ての責任を自分一人の身に引き受けながら、越えていこうとしたのである。

だがそれも、所詮、幸福とは程遠いものでしかないことが暗示されている。吉三は、「世の中つて厭やな物だねと嘆息する」お京に、「夫れはお前の心がらだ」と言い放つ。貧の厳しさの中でやむを得ないとはいえ、今ここにある自己の生を見つめようとせず、漠然とした未来に、「身一つ」の「出世」を夢見てきたお京の「心がら」は、吉三によって相対化されてもいる。「そんな嘘つ吐きの、ごまかしの、欲の深いお前さん

を姉さん同様に思つて居たが口惜しい、最うお京さんお前には逢はないよ、何うしてもお前には逢はないよ」それは吉三の、自己の衝動に開き直つたお京への断罪であつた。

お京は、追ひ詰められた自分の思いを理解してはもらえずに、孤独をかみしめるしかない。家族のようにありたいという願いを碎かれるのは、何も吉三ひとりだけではなかつた。

私は本当に兄弟とばかり思ふのだもの其様な愛想づかしは酷からう、と後から羽がひじめに抱き止めて、気の早い子だねとお京の諭せば、そんならお妾に行くを廃めしなさるかと振りかへられて、誰も願ふて行く処では無いけれど、私は何うしても斯うと決心して居るのだから夫れは折角だけれど聞かれないよと言ふに、吉は涕の目に見つめて、お京さん後生だから此肩の手を放してお呉んなさい。

作品は、この言葉を最後にぶつとりと絶ち切られるように終わる。二人は、共に別れを望んでいないにもかかわらず、もう決して互いの生を理解し合えぬまま別れていかねばならない。後に残されるのは、永遠に続く二人の悲しみの沈黙で

ある。

おわりに

吉三とお京という二人の人物の拮抗によって描かれているのは、この生き難い世をいかに生きていけばよいのかということに対する模索である。ここには、吉三のように、目の前の現実を見つめ、日常の枠内にとどまりながら、自己の幸福を、人との愛情に満ちた共生の中に求めようとする生き方と、お京のように、あるべき状況や自己の姿を求めつつ、どうにもならない心の衝動を抱えながら、世俗の倫理を超脱してしまっても、自己を肯定していこうとする生き方が描かれている。しかし、吉三の求める幸福な状況は、実現されることの困難なものとして描かれており、また、お京の生き方も、吉三によって批判されている。一葉は、一方では他者との共生の夢を描きつつも、もう一方ではあくなき生の充足を求めようとする心の燃焼を描いていった。そして、他者との共生の困難に直面させられたのである。一葉は、結局のところ、どう生きればこの世の生き難さを乗り越え、幸福な状況を得られるのか、答えを見出すことはできなかつたように思

われる。

そして、それぞれに、自己の生を生きる人と人々が、共に生きることの困難さと、全ての責任を、自分一人で引き受けながら生きねばならない人間の姿は、この後の作品に取り上げられていくこととなった。

注

- (1) 「わかれ道―その位置について―」(『国文学解釈と教材の研究』二卷二号一九五七・一一)
- (2) 「わかれ道」(『国文学解釈と鑑賞』四五卷一号一九八〇・一)
- (3) 「樋口一葉『わかれ道』考」(『山形女子短期大学紀要』一六号一九八四・三)
- (4) 「『わかれ道』」(『国文学解釈と鑑賞』五一卷三号一九八六・三)
- (5) 「『わかれ道』」(『国語展望』(別冊)四九号(現代文研究シリーズ)一七樋口一葉)一九八七・五)
- (6) 「『わかれ道』の位相」(『駒沢国文』二五号一九八八・二)
- (7) 「共同討議 樋口一葉の作品を読む」(『国文学解釈と教材の研究』二九卷一三号一九八四・一〇)
- (8) 「『貧者の宵―わかれ道』試論」(『文学』五六卷七号一九八八・七)
- (9) 前出

- (10) 前出
- (11) 戸松泉「交錯した〈時間〉の意味―『わかれ道』の行方―」
 (『論集樋口一葉Ⅱ』一九九八・一一おうふう)
- (12) 横山源之助『日本の下層社会』(明三三・五) 参照。
- (13) 管聡子氏は、「一葉の〈わかれ道〉―御出世といふは女に限りて―」(『国語と国文学』七〇巻二号一九九三・二二)で、
 「お松に拾われ傘屋の職人になれたことこそ奇跡に近い僥倖なのであって、吉三は最初から『出世』のとざされた存在として設定されていたと言うべきでだろう。」と述べている。
- (14) 前出
- (15) 前出
- (16) 橋本威「『わかれ道』―発想の観点から―」(『梅花女子大学文学部紀要』一八号一九八二・一二)
- (17) 高田知波氏(前出)は、「お京に関する表現の空白性の中にその『笑い』だけが浮かびあがってくるという構造」を指摘し、「泣きての後の冷笑」という緑雨の評言に通脈する一葉の意図を想定」している。